

1. 登山記録

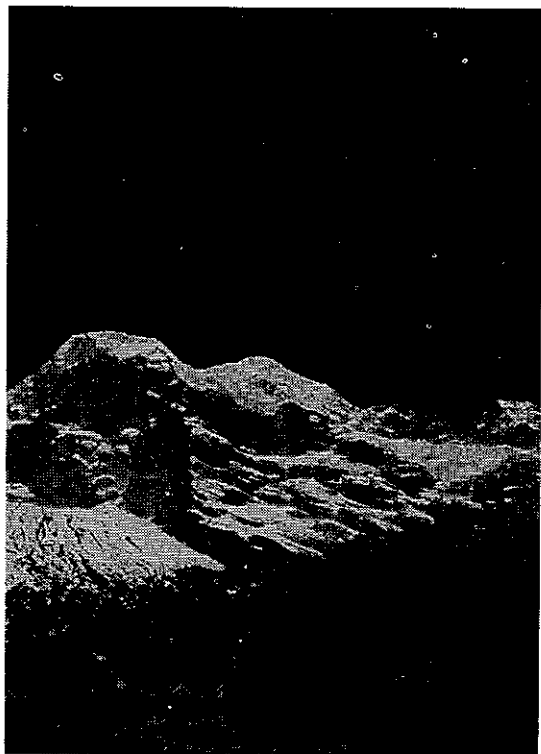
海外の登山

クスムカングル東壁単独登攀

山野井 泰 史

クスムカングル、6,370m、すべての面が急峻な岩と雪の壁を形成しており、いわゆるピークハンターには少々難しい山かもしれない。クスムカングルは、面倒な手続きもないうえ、アルパインクライミングの能力を試すのにすばらしい山である。既にこの山には、数本のルートが開かれているが、東壁と西壁は未登を保っており、両壁とも切立っている。当初、私は西壁を考えていたが、少々アプローチが困難であることと、岩の性質が悪いと噂で聞いたので、東壁に向かうことにしたのだ。クスムカングル東壁そのものは、メラピークを登るクライマーの目に触れられていたものの、登る対象と考えていなかったのだろう。日本出発前は、写真など、資料を集めるのに苦労した。ある日、長年の友人であり、1995年、レディースフィンガー南西壁と一緒に登った中垣大作がビックウォールクライマーとしての目で東壁の写真を数多く撮っていたことを知った。その借りた写真によると、中央部は、クラックは確認できたが赤い岩が多く脆そうである。標高差は1,500mぐらいか。登るとしたら、ポーターレッジを使うことになるだろう。右寄りの壁はクラックはあまり確認できなかったが、中央部よりは傾斜がなく岩も堅そうである。ここなら30~40時間で登れそうではあるが、どのラインを選択したとしても、今回も私が一番満足する方法、ソロで決行する予定である。ソロを行う私に対して、多くの友人達は批判的ではあるが、ソロは競争もなくまた自分の判断で色々な物事を決定するのが好きな私にはとても合っているのだ。

ハクラに到着してまず驚かされたのは、クスムカングルBCのポーター料金の高さである。彼等に聞けば、数年前4,500mの峠で5人のポーターが雪崩で死亡したと言う。これで一気に料金が上がったわけだ。私も日本で富士山のポーターをやっているので彼等の苦勞も危険もわかるが、日本の不景気のしわよせは我々クライマーにもきている事を考えると、このポーター料金はいたかった。キャラバン自体は順調に進み、私は時々友人やポーター達と離れて歩き、ヒマラヤの自然をゆっくり味わった。



1. 登山記録

1998年4月14日、時々大きなセラック崩壊を見せ、ヒマラヤのスケールを十分感じさせてくれる4,600m地点にBCを置いた。BCでは毎日のように山盛りのダルバートと、現代人の私は少々ビタミン剤のおかげで体調はとてもよかったのである。それに引き換え天候はエルニーニョがまだ続いているのか、午後は曇りから雪になる。あまり歓迎したくないパターンが続き、強いモチベーションがなければアタックチャンスは望めそうもなかった。不安定な天候の中、壁の全容を観察しつつ順応行動を行い、最終的にはクラシックルートである南東面の5,700mまで到達した。さらに、その間東壁のルートは決定した。予定していたルートからでは、いささか危険であることが明らかになり少々右から攻撃することにした。この様な大きな壁では事前に想定していたラインが不可能な場合はよくあるのだ。

雪の降った直後の4月21日午前4時、私の誕生日であるこの日、一人東壁へ向けて出発した。今回も大きな登山隊とは違い、特別なタクティクスは何もない。ただ太陽の動きに注意し装備を最小限にとどめ、頂上に向かうのみだ。持っていくものは、アイスアックス2本、クランポン、必要不可欠なヘルメット、岩用チタンピトン5本、アイスピトン6本、チョック4本、6mmロープ80m、小型テント、カメラ、グローブと靴下の予備、少々のお食糧である。標高差1,200mのこの壁は、下部600mはミックス壁で構成されており、スピードのないクライマーには危険なルートであることはすでにわかっている。いつもどおりの緊張を感じながらモレーンを大きく左から回り込んで岩が始まる所を目指す。取付でストックを残し、何度も腕をグルグル回したあと、グローブをポケットにしまい素手で登り出した。下部岩壁では指の力を必要とする6級のロッククライミングがあり、チョークが欲しいくらいだった。岩は乾いていたがクラックは発達しておらず、私のバランス感覚を総動員した。急な箇所もいくつかあったが、幸い比較的短かった。しかし、難しい部分では、ザックは後でロープで引き上げた。この手のクライミングに必要なのは、あくまで技術であって、体力はその技術を発揮するための体力であることが明らかである。私に陽が当たる時間まで登っていると、潰されるくらい大きな落石に当たる可能性があるので、急がなければならない。特に中央プラトーに抜ける直前のV字状の壁には、小さな氷と石が無数に落ちていて緊張した。出口はチムニーになり、両足を岩にブリッチング、アックスはクラック奥の氷を求めることになり、背筋が疲れた。上部ミックス壁では、スラブと傾斜が急な氷があり、いくつかのセラックが稜線への抜け口に危なげに引っ掛かっている。上部は危険を回避するため、夕方から登り出したが、あいにく新月のため、夜にはライン取りが難しくなった。しかし夜間のクライミングでは、ヘッドライトの光が届くだけの視野になり、その分傾斜は増して見えるが、むしろ集中力は増す。急なクローワールに入り込み直登する。上を見ると、大きなセラックが私を叩き落とすのを待っているかのように立っていたので、少々スピードを上げてみるかと考えたが、それは不可能なほど雪は柔らかかった。自分を確かめるクライミングは、爽やかな恐怖と一緒に徐々に高度を上げ時々後方のP43を見る余裕も出たが、クローワール最後のセクションは、青

1. 登山記録

く光った切立った氷だった。ここでは本当に、視野が狭くなるくらいの緊張を強いられた。更に、登りでは使用しないロープが重くて呼吸が乱れる。その上残念なことに、稜線に抜けられると思った時は、右も左もオーバーハングしたセラックに囲まれてしまい、行場を失ってしまった。アイスピトンを打ち、一度下降して更に右のクローワールから登らなければならなかった。頂上への最後の登高は、特別劇的なものではなかったが、ただとても寒く、赤みがかかった空はメラピーク上空で稲妻が光り、自分がこの大きな自然の中ではとても小さな存在であることを感じさせるのに十分であった。稜線はそれほどクレパスもなく平らで、むしろ緊張感が足りないぐらいだった。頂上手前のプラトーで不要な装備をデポし、寒風の中稜線を進む。BCから22時間後の夜中の2時、私は頂上にアイスパイルを刺した。頂上で1, 2分写真撮影に費やし、白い山々だけが見える幻想的な風景の中下山を開始した。私の周囲には、この頂よりも高い山々が見渡せたが、心は満たされていた。頂上に着いた安堵感からか少しアドレナリンが出たが、この気持ちを変えなければならない。これからも長い下降がまっているのだ。集中力をもう一度作らなければ。最初はボラード、次はアイスピトン1本による懸垂下降、そして厳しいクライムダウン。細く長いロープはすぐ絡みつき苦勞する。いらいらしないよう自分を励ます。下部岩壁を下降しはじめようとした時には、太陽が壁を暖め危険な状態になっていたし、手持ちのロックピトンでは足りない判断したので、P43の方へ向かい、危険ではあるが素早く下降できるルンゼを選んだ。大きな黒い石がいくつもすべり落ちており、体はくたくたに疲れていたが、休むわけにはいかなかった。安全地帯であるモレーンから緑の丘に着いた時には、みるみる力が無くなってきたので、胸ポケットに残っていたチョコレートをかじった。エネルギーを入れた私は、また歩き出してもよかったが、6年前挑戦したメラピーク西壁のルートを目で追い、また私の周りには美しい花崗岩がたくさんあったので、登る気もないのに、ホールドとスタンスを目で追ってしまった。私が「遂にやったぞ」と口に出したのは、35時間後にBCに帰還した時だった。

(日本登攀クラブ)